

(三重県)

地域資源の活用で目指す 産業と文化の調和した環境先進都市

たなかとしゆき
田中俊行
四日市市長

人・モノ・情報が 交流する地理的条件

三重県四日市市の市名は、よく知られているように「四日の市」に由来している。「四日市」の名称が最初に文献に現れるのは15世紀半ば(室町時代半ば)だ。つまり毎月4の付く日に当地で「市」が開かれるようになって、少なくとも500年以上もの歴史があるということになる(現在は、市内12カ所で定期市が開かれている)。

江戸時代に東海道(五十三次)が整備されると四日市は江戸・日本橋から数えて43番目(四十三次)の宿場町となり、ますますにぎわいが増した。定期市の開かれる商業都市としての盛名も全国的なものとなっていたが、四日市でなぜ500年以上も前にこうした定期市が開かれるようになったのか。それには諸説あるものの、最大の要因が四日市の

地理的条件にあることは確かだろう。

旧東海道・四日市宿には東海道と伊勢街道の分岐点(日永追分)があり、現在、そこには「江戸から100里」の碑が立っている。旧東海道の全長を約500km(実際は492km)と計算すると、四日市から京までは残り100km弱。京まで行けばもちろん大阪は近い。名古屋は同じ伊勢湾に面しており、まさに指呼の間だ。高速交通網のなかった時代に江戸と直結する東海道沿いに位置し、至近距離で名古屋・京都・大阪に囲まれ、天然の良港(四日市湊)があり、日本全国から参拝客が集まる伊勢街道と東海道の分岐点にも当たる。こうした地理的条件は「人・モノ・情報」が自然に集まる交流都市形成の重大な要素だ。そのアドバンテージが、四日市が近代以降も港湾都市として、産業都市として大きく発展していく礎ともなったのは間違いない。

「近代以降の四日市にとっての最も大きな転換点は、明治17年、地元の廻船問屋・稲葉

三右衛門が私財を投じて行った四日市港の整備工事が完成したことにあります」

そう語るのは田中俊行・四日市市長だ。

江戸時代末期の安政大地震により港が壊滅状態にあった四日市は、四日市港の近代化とともに再びにぎわいを復活させ、明治30年には全国で45番目となる市制を施行した。さらに明治32年に伊勢湾で最初の開港場に指定されると、食料品・肥料・綿花などを中心とする輸入港として発展。繊維・機械・化学





毎日大量の物資が入出荷する四日市港（ポートビル14階展望室からの眺望）

などの近代工業が勃興する要因となった。四日市港はその後も近代港湾にふさわしい機能を高め、昭和11年には日本板硝子四日市工場、昭和16年に石原産業四日市工場（化学産業）が操業開始。これを皮切りに、湾岸工業地帯としての礎が築かれ、戦後の石油化学コンビナート形成へとつながっていく。

「塩浜地区には戦後、戦時中に稼働していた第二海軍燃料廠の跡地が残されました。国は高度経済成長を図る際に『石油化学工業の



今も市内中心部に残る旧東海道の街並み

育成対策』を掲げましたが、その一環として昭和30年に広大な燃料廠跡地への石油化学コンビナートの建設も決定され、四日市コンビナートの出発点となりました」（田中市長）

四日市コンビナートはわが国の高度経済成長とともに急速に発展。拡大に次ぐ拡大を続け、現在では約960haの広大な敷地に第1・第2・第3コンビナートが形成されている。

各コンビナートには国際競争力に優れた多数の大手メーカーが立地し、平成24年実績では、1兆5300億円（化学工業約9000億円、石油・石炭製品製造業約5200億円）という、全国有数の製造品出荷額を記録している。



昭和6年完成の末広橋梁（跳ね上げ式、国指定重文）と潮吹き堤防の重文コンビナートの新たな観光コンテンツ

こうした急成長の背景には、ご承知のように石油化学コンビナートから排出される硫黄酸化物などによる大気汚染（四日市公害）の発生があり、その克服に向けた大変な努力も積み重ねられてきた。後に述べるようにその成果は、四日市市を世界的にも類例のない「高度に環境意識の高い産業都市」へと変身させるが、「その事実がきちんと伝えられていない傾向がある」と田中市長は慨嘆する。

「例えば小中学校の社会科教科書なども、

コンビナートに 光を当てる工場萌えブーム



女性にも大人気の「コンビナート夜景クルーズ」

四日市公害については記述しても、少し前までは、その後の克服のプロセスを書いてあるものがほとんどありませんでした」

そこで田中市長は折を見ては教科書出版社に申し入れ、四日市公害のその後についての認識を改めてもらうよう努め、少しずつ改善されてきたという。また最近ではそうした地道な努力が報われるかのような新たな現象も起こり始めている。

7〜8年前から相次いで出版された石油化学プラントなどの写真集が好評を博したのを契機に、ウェブサイト上に工場の夜景がアップされるようになり、「工場萌え」(コンビナートなどのもつ構造美を好む現象)という言葉がブーム的に流行するようになったのはその一例といえる。さらにこれまで観光の対象とはされなかった全国の工業地帯やコンビナートなどの風景や夜景が、にわかには有力な観光コンテンツとして注目を集め始めた。中でも四日市市・川崎市・室蘭市・北九州市・周南市・



四日市市の観光振興を盛り上げる観光大使の任命式(左は「こにゅうどうくん」)

尼崎市のコンビナート群は「日本6大工場夜景」とされ、この6市は平成22年から持ち回りで「工場夜景サミット」を開催、その魅力を全国発信している。(当初は四日市市・川崎市・北九州市・室蘭市の4市でスタート)

以来、四日市市にも工場・コンビナートウォッチングの観光客が多数訪れるようになったが、とりわけ人気なのが船上からコンビナートの夜景を見る「コンビナート夜景クルーズ」だ。川崎市に続いて四日市市も平成22年から「四日市コンビナート夜景クルーズ」を週末に開催し、大好評を博している。

「こうした機会をとらえて四日市市の新たな魅力を発信するため、平成23年に『四日市の観光元年』を宣言するとともに、四日市市観光戦略会議を立ち上げ、おもてなし機能を加えた



高級B級グルメとして人気の「四日市とんてき」

観光案内所「四十三(よそみ)茶屋」の設置など、多彩なプロジェクト案に基づいたさまざまな発信事業を行っています(田中市長)

観光戦略会議発案のプロジェクト以外にも、四日市市では次のような観光振興のための情報発信事業を多角的に展開している。

事例①観光大使による魅力発信(四日市市ゆかりの各界著名人10名に委嘱。任期3年)／事例②海外での情報発信(友好都市の天津で「四日市フェア」開催)／事例③マスコットキャラクター「こにゅうどうくん」の選定(ゆるキャラ「こにゅうどうくん」を四日市市の宣伝マンに任命し、市内外のイベントなどで活躍)／事例④ご当地グルメ「四日市とんてき」の発信(厚めの豚肉をニンニク入りの濃いタレでソテー。キャベツ付き)／事例⑤「四日市公害と環境未来館」整備、市立博物館リ



世界最先端、世界最大級の半導体工場(東芝)

ニューアル(どちらも平成27年3月オープン。「四日市公害と環境未来館」は新設で、四日市公害の歴史と教訓を次世代に伝えるとともに、四日市市の公害や環境問題への取り組みを国内外に発信する。市立博物館は常設展示やプラネタリウムなどを一体的にリニューアル。古代から現代まで「道」を通して発展してきた四日市の暮らしの変遷を展示)ほか――。

四日市市には既に「四日市市環境学習センター」があり、四日市公害のプロセスとその対策史などの展示や、資料の公開を行ってきた。それらの資料は事例⑤の「四日市公害と環境未来館」に移設され、同館のオープンとともに「四日市市環境学習センター」は統合されることになる。また「四日市市公害と環境未来館」の観覧は、工場夜景クルーズなど現

地見学と組み合わせることによって、産業観光プログラムの重要かつ立体的な効果をもつコンテンツになることも期待されている。

重層構造を支える 産業都市のポテンシャル

四日市市のこうした観光振興事業の内容を概観して改めて思うのは、「四日市公害」に対する四日市市の尽きせぬ思いだ。悔恨や反省はもろろんだらうが、それを克服するために費やしてきた長い日々(それは今も終わっていない)を絶対に風化させないという強い決意が、観光振興策にもひしひしと感じられるのだ。

その決意は同時に、環境に配慮した重化学工業・先端産業をより一層発展させながら、観光施策などを通じて四日市に古来備わっていた歴史・文化的土壌にさらに磨きを掛けつつ発信し、「環境にやさしい産業文化都市」(産業と文化が調和するまちづくり)ともいうべき新しい都市像を、四日市市が目指す要因ともなっている。

産業と文化が調和するまちづくりについては後に述べるが、大きな公害問題を抱えながらも、その克服と産業的発展を同時に成し遂げてきた四日市市の軌跡の概略をここでご紹介しておきたい。

大気汚染は昭和34年に第1コンビナートが本格稼働し始めた直後から発生し、その後、急速に深刻化していく。市民を中心とする反

公害運動も激化していくが、四日市市では衛生課に「公害対策係」を設け、三重県公害対策室とともにその対策に当たった。例えば昭和40年から四日市市が実施した市単独による医療費救済制度は、わが国では初の取り組みで、その後の公害対策史に大きな一石を投じた施策として、今日でも評価が高い。

さらに昭和47年に、四日市市は三重県的主导で硫酸化物の総排出量規制に踏み切った。その効果は大きく、昭和51年度には市内全域で、ぜんそくの主な原因とされる二酸化硫黄濃度が国の基準を下回り、現在に至っている。同時に住工分離の名の下に、郊外丘陵部に大規模な住宅団地の開発が公的セクターにより行われた。このことが、高度経済成長期からの就業人口増加の受け皿としての役割を果たし、四日市市がこれまで人口減少に転



四日市市内だけを走る貴重な特殊狭軌(ナローゲージ)鉄道・近鉄内部・八王子線



じなかつた要因とも言える

また、企業と行政が一体となつて協議、検討を進めた結果、平成15年に全国初の「技術集積活用型産業再生特区」の認定を受けた。それによって、臨海部については汎用品から高度部材の供給へと質的変換を遂げ、さらには企業立地奨励制度や民間研究所立地奨励制度の活用などにより、半導体・自動車・電機・機械・食品など多様な産業の内陸部への誘致にもつながつた。世界最先端・最大級とされる半導体工場(東芝)の誘致はその象徴的な事例といえる。こうした施策が比較的スムーズに推移した背景には、各種助成制度の効用もさることながら、前半に述べた交通の要衝ぶりなど、四日市の優れた地理的環境も奏功したことは言うまでもない。

「四日市は江戸時代からずっと交通の要衝でしたが、現在は東名阪自動車道や名神高速道路、伊勢湾岸自動車道、伊勢自動車道などの高速交通網によって、名古屋・京都・大阪との距離はさらに縮まっています。新名神高



「大四日市まつり(8月)」(写真下)に登場する「大入道」(写真上)は日本一大大きいカラクリ人形(江戸時代末期製作)で、「こにゅうどうくん」の父親という設定

速道路が全通すれば、京阪に加えて神戸への道のりも格段に便利になります。さらに中部国際空港は伊勢湾の対岸に見えています。東京(名古屋)間を1時間で結ぶリニア中央新幹線が開通すれば、名古屋から30分の四日市は東京とも1時間半で結ばれることになりま

す(田中市長)
四日市コンビナートの製造品出荷額の事例は既に触れたが、こうした立地環境の下、着々と立地が進んだ内陸部の工業地帯も既に四日市コンビナートと互角の成績を上げるようになってい

ち57%で、電子部品産業も24%を占めている。従業員数に至っては石油化学産業が約30%なのに対し、電子部品産業は25%とほとんど同じ水準になっている。また石油化学コンビナートについても、製品の付加価値化が奏功してコスト削減な業績を維持しており、産業都市としての四日市市のさらなる進化・重層性を促す要因となっている事実は見逃せない。

このように公害問題への取り組みと同時に進められた、石油化学コンビナートの製造体制の体質改善、住工分離や内陸部への先端産業誘致などの施策は、四日市市の都市としての骨格さえも組み替えたといえる。また公害問題への積極的な取り組みは、各種の脱公害技術を生み出す結果をもたらした。その成果は平成2年に三重県、四日市市および中部経済界の連携で設立されたICETT(公益財団法人国際環境技術移転センター)の存在が象徴する。ICETTには設立以来、発展途上国を中心に世界各国から、四日市発の産業における先進的な環境保全技術を学ぶ研修生が訪れ、その成果を持ち帰り続けており、国際的な評価も高い。(国内からの研修生も受け付けている)

産業と文化が調和するまちづくり

四日市市は平成24年に「四日市の文化力元年」を宣言した。公害をはじめ幾多の困難を

四日市市

市 政 報

(三重県)

乗り越え築き上げてきた産業都市としての実力は、既に述べた。だが真の意味で魅力と風格を備えた存在感のある都市になるには、産業の活力だけでなく文化の創造と発信が必要不可欠との認識から発意されたという。

四日市市には室町時代から続く「市」や土鍋の全国シェア8割を占める萬古焼、全国一の生産量を誇る「かぶせ茶」など全国的に知られた地域資源が多い。それら伝統的な地域資源に加え、現代の四日市市民が主役となって自ら育て上げ、全国発信できる文化を創造する。それがひいては地域の誇り、魅力や風格を醸し出すという考え方が「四日市の文化力元年」宣言には込められている。

同宣言に基づいて、平成24年度から「全国ファミリー音楽コンクール in よっかいち（ファミコン）」「四日市ジャズフェスティバル（ジャズフェス）」「郷土が誇る芸能大会」が同時に開始された。

中でも「家族」と「絆」をテーマとするファミコンは、文化力の創造・発信の中核的事業と位置付けられている。全国公募で選ばれた家族（親族）によるアンサンブルを競うイベントで、既に3回実施され、注目度もじわじわ全国的に広がりつつある。

ジャズフェスは市民による実行委員会が企画運営するイベントで、毎年100組ものプロ・アマバンドが参加



全国区ブランド四日市の「かぶせ茶」を生み出す広大な茶畑



家族と絆がテーマの「全国ファミリー音楽コンクール」(2014年グランプリチーム)



市民が企画・運営の「四日市ジャズフェスティバル」(毎年9月)

し、新名物になりつつある。市内各地区の推薦による出場者が伝統芸能や趣向を凝らした芸能を披露し合う郷土芸能大会と合わせ、形態の違うこれらのイベントも、ファミコンと同様に、地域や家族の絆がなければ成立しないものばかり。つまり自ずとコミュニティの再生にもつながるもので、こうしたイベントが定着すれば、四日市市が目指す「産業と文化の調和した環境先進都市」への道筋もより鮮明に見えてくるのではなからうか。

ところで昨年は、地元の廻船問屋・稲葉三右衛門が明治時代に近代港湾・四日市港の整備工事を完成させてから、130年の節目に当たる年だった。折しも昨年3月、前年に新

たに設置された四日市市産業活性化戦略会議は「四日市市と産業活性化戦略に関する提言書」を策定し、リニア中央新幹線開通後の四日市市が目指す産業都市としてのイメージを「日本の産業界をリードするアジア随一のクオリティ産業都市」と定めたことを発表した。

リニア中央新幹線が開通すれば従来培われてきた高速交通網は、まったくの新段階に突入する。その「時」に照準を合わせ、市民主体の文化力を地道に醸成しつつ、産業都市としての新たなステップアップとともに、その調和の達成を目標に進化していく四日市市の「今後」は要注目だ。

(取材・文 遠藤 隆／取材日平成26年11月18日)